

歯学部創立50周年によせて

新潟大学名誉教授 織田 公光

歯学部創立50周年を迎えてお祝い申し上げます。

私は本年の3月31日をもって定年退職し、すぐに福岡市へ居を移しましたので学部のために直接かかわっていくことは叶いませんが、学部のさらなる発展を遠くから祈念しています。

私が歯学部採用されたのは1993年のことです。かつて25周年の記念誌に執筆を依頼された記憶があり、私自身は大体その後の四半世紀を歯学部で過ごしたことになります。25年前のこととなると、在学中の学生さんと言うに及ばず、現職の教授の方々でも当時の記憶ははっきり残っていないと思われるので、昨年退職に際して書いた文章からの一節を抜粋しました（以下）。

「さて、赴任当時に世の中では何が起こっていたかという、少し長いのですが、「輝く日の宮、丸山才一著 講談社文庫」の一節から引用します（160～168頁抜粋）。

『1993年は平成5年、酉年である。1月、皇太子妃が内定した。アメリカ大統領にクリントンが就任した。2月、ニューヨークの世界貿易センタービルで爆弾テロがあつた。1994年は平成6年、戌年である。1月ロスアンジェルスで大地震があつた。死者が61人出た。都市機能がマヒした。1995年は平成7年、亥年である。1月、神戸で大地震があつた。2月、最高裁大法廷は、ロッキード事件で故田中角栄元首相に丸紅から5億円がわたったとする1、2審の有罪判決を認め、ロッキード裁判が終結した。目黒公証役場で拉致事件が起こった。3月、東京の地下鉄5本で猛毒のサリンが撒かれた。警視庁はオウム真理教の25施設に強制捜査を始めた。国松孝次警察庁長官が東京荒川で銃撃され、重傷を負った』。

こうして振り返るとはっきりと憶えていることもあり、またそうでないこともあります。赴任後の数年は戦後史上でも特筆すべき天災や事件があつたことがわかります。その後も新潟中越地震（平成16年、2004年）、そして東北地方太平洋沖地震（平成23年、2011年）も記憶に新しいところですが、支障なく大学生活を継続できたことは幸運

でした。さらに言うと、稀有なことに戦後70年間日本は戦争に巻き込まれることなく平和で社会も概ね安定しており、日本経済の成長と発展に伴って育った運の良い世代に私は属していたと思います」。

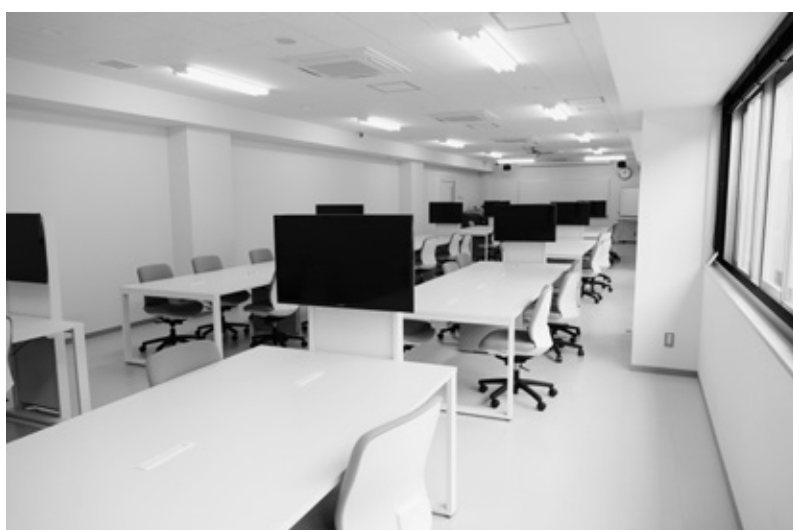
直接または間接的にこれらの災難に巻き込まれた方もおありでお気の毒でしたが、歯学部自体は大きな被害にもあうことなく幸いでした。しかし、社会的には歯科医師の過剰が表面化してゆき、同じ市内にもう一つ歯学部があるという地域的な特殊性からこのことは学部内では共通して強く意識されてきたと思います。歴代の学部長を中心に学部学生的大幅な定員削減、口腔生命福祉学科の設立など次々に先を見据えた積極的な対応で難局を乗り切ってきたことは称賛に値するのではないのでしょうか。また、昨年度に長年の懸案であつた大型改修が完了したことで効率の良い組織化された教育と研究のハードな面が整ったことは喜ばしいことでした。今後世代交代した若い教授陣を中心にして教育や研究のソフトの面でのさらなる緊密化、充実と発展を期待しています。一方で気がかりなこともあります。新潟大学全体を考えると国立大学法人の中でもその評価は厳しいものがあり、今後予算面（特に人事に関連した）での締め付けにより教育や研究に影響が出かねないことが心配です。具体的に言うと口腔生化学の助教が3月31日で転出しましたが、少なくとも今後2年間その後任は人件費抑制の名目で採用できないことが新潟大学として決定しています。優秀な新任教授の赴任が決まっているにもかかわらず、もともと1名にすぎない助教の長期不在は研究室の立ち上げに支障をきたすことが懸念されます。これは何も口腔生化学分野に限ってのことではなく、せっかく立派な講義室や研究室が整備されても肝心のスタッフが充足されないのでは歯学部の将来は厳しいと言わざるを得ません。2018年からの受験生数の大幅な減少を含めて、ある意味天災にも匹敵する困難に歯学部は立ち向かっていくことになる訳で、皆様が叡智を結集して打開されていくこと念じて筆を擱くことにします。



臨床示説室



臨床基礎実習室



マルチディスカッションルーム